

老いの「索漠」考

久保田 美 法*

老いの一つの姿に、逆説的ではあるが、「みずみずしさ」というものがある（久保田 2016）。本稿では、不可避でありながらも見過ごされがちな、老いのもう一つの側面である「索漠とした」心象を考察した。

このテーマについて考えるために、本稿では戦争体験の語りに着目した。高齢者の語りを聴いていると、時に「戦争のイメージ」と「老いるという体験」が重なるように思われることがある。老いとは一つの戦争であり、戦争体験者は、老いの過程で再び“戦士”になるとも言えるのではないか。それは日常の中の私かで孤独な闘いであるが、「老いの『みずみずしさ』」はそうした闘いから、時に生まれてくるものと考えられた。

キーワード：戦争体験、イメージの重なり、隠蔽する力

老い初めしこの胸底の漠^{ひろ}さをば何に喩へて子らに告ぐべき
宮終二（1975）

はじめに

随筆家で稀代の目利きとしても知られた白洲正子が80歳を超した頃に、こんなエピソードがある。

「最近、ある座談会で白洲さんは、ふと『索漠を楽しむことだってあっていいんじゃないですか。私など本当は索漠たるものですよ』と発言され、急にその場に居合わせた人達が意外な発言ゆえに静まり返ったら、『訂正するわ、必ずしも今索漠ばかりじゃない』と付け加えて皆を笑わせたことがあった。たぶん、訂正の発言の真意は、まだ若い人達には『索漠』と言ったってその意味を誤解するだけだろう。訂正しておくにこしたことはない、しかし『索漠』に変わり

* 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部准教授

はない、『散リユエニヨリテ、咲ク頃アレバ面白キナリ』ということではなかったか。』（青柳 1991：327）

老年期に入った白洲の文章は「年々に歯切れがよくなる一方で、艶やかさを増して行くように思われた」（青柳 1991：327）という。そんな白洲の内にある「本当は索漠たるもの」という心情は、周囲の若い人に想像しにくかったのは無理からぬことかもしれない。しかしこうしたことは、相手が白洲正子でなくとも、私たちの日常でよく見られるのではないだろうか。

一方、高齢者にとっても、その感慨は、若い頃には思いも及ばないことであるようだ。冒頭に挙げた宮柊二の歌に「老い初めし」とあるが、小高（2016：6）はこの歌から「老い自身も戸惑っている。掴みかねている」「すべてが初めての経験」と指摘している。また「何に喩へて」とあるように、喩えるものなどみつからない、本質的な語りがたさもあると推察される。

しかしやはり、周囲に聞く耳がないゆえに、高齢者が語ったとて分かってもらいようもないとあきらめ、秘かに堪えているところもあるのではないだろうか。筆者自身、高齢者病棟や高齢者施設に通う中で、そこに何ともいえない寂寥を感じたり、高齢者が老いの先に何か小暗いものをじっと見ているのを感じるものがしばしばあるが、果たしてそこにどれくらい身を浸せているかは心許ない。しかし未だ真に分かり得ないものではあれ、そこに少しでも思いをいたすことはできないか。老いはいずれ誰もが辿る道である。

白洲が語っていたように「索漠を楽しむ」とは、老いの一つの境地とも考えられる。その文章が年々「艶やかさを増した」ことともまた無縁ではないだろう。

宮柊二の短歌にあった「^{ひろ}漠さ」は「索漠」の「漠」であり、「漠」とは「広々として何もないさま」（広辞苑第六版）という意味である。この「漠さ」とはどんなものか。どのような心象風景がそこには広がっているのか。それを抱えて生きていくとはどういうことなのだろう。

1 「老いるという体験」と「戦争体験」

高齢者の何気ない語りを聴いていると、時に戦争の話や戦争を彷彿とさせるような話に出会うことがあり、筆者にはそれが老いの心情と重なるように思われる時がある。

戦争体験は、二度と同じことを繰り返さないために、その悲惨さを伝えようとして語られることがあり、また伝えておかねばという責任感から、重い口を開く人もいる。

しかし、そのように設けられた継承の場ではなく、日常の何気ない語りの中でふっと戦争のことが語られる時、それとはまた異なる意味もあるように思われる。

いつも穏やかでにこにことしていた90代の女性Aさんは、自分の家が「丸焼け」になったと、くりかえし切々と語られた。

「家がね、みんな焼けて、灰になってしまったって。娘がそんなこと言ってました。だからねえ、帰りたいけど、帰ったって、何にもならないよって、娘がそんなこと言うんです。」「誰が火をつけたのか。憎たらしい」「娘時代はね、幸せでしたけど。それが急にひっくり返ったから。真っ暗」「自分の生まれたところがなくなるのは、悲しい」

焼けたのは実家のみならず、その周辺一帯ということのようだった。ごく最近の出来事のように聞こえたが、本当にAさんの故郷は丸焼けになったのか。「家に帰りたい」と語る母親を説き伏せるために、娘がそう言ったのか。しかし、あきらめてもらうためとはいえ、娘がそのようなことを言うだろうか。

それにしても、一切が焼き尽くされて無くなる「丸焼け」のイメージは鮮烈である。自分の原点である故郷が「みんな灰になって」帰る場所がないという心象風景は、まさに索漠ではないか。

Aさんはこの「丸焼け」の語りを、一時期、会う度に語ったが、そこでは必ず以下のような語りも織り込まれた。

「うちはね、跡取りの一人息子が戦争にとられて。戦地に行って、それで亡くなった。親はね、胸がはりさけるようだったと思いますよ。ねえ、急にひっくり返った。」

「ひっくり返った」という言葉が「丸焼け」の語りと共通しているが、跡取りの戦死にAさんの親の「胸がはりさける」とこと、Aさんの故郷が丸焼けになって「真っ暗」になることは重なっているように思われた。Aさんはこの「丸焼け」と「跡取り息子の戦死」の話を行きつ戻りつされたが、「親の悲しみ」に心を寄せながら、それに言寄せて自分の悲しみを語っているようにも思われた。また「丸焼け」は何によるのかは判然としなかったが、「戦死」の話とも相俟って、戦火によるイメージも筆者には浮かんだ。

また80代の男性Bさんは、ある時こんなことを言われた。

「飯が食われへん!飯がもらえへんのや!米は配給やろ?もうあんな生活は嫌や!そんで負けて、踏んだり蹴ったりや!飯がもらえへんのや!」

もちろんBさんは食事をもらえてないわけではなかったし、今は「米は配給」の時代ではない。ともすれば、“食べたことを忘れてだけ”と聞き流されてしまう言葉であるが、そこに心理的な空腹感や飢餓感はないか、それが一体どれくらいのものか、思いをいたしてみることも必要だろう。「もうあんな生活は嫌や」と言われているので、Bさんは過去に戻って、今が戦中あるいは敗戦直後と思っているわけではなかっただろう。しかし単に当時を思い出したというよりも、今の切迫感が当時のそれと重なっていたように思われる。

Aさん、Bさんの語りは、先にも述べたように、「体験の継承」を意図したものではないだろ

う。また二人の語りはいずれも、いわゆる「回想」とは異なると考えられる。回想では、聴き手との関係性の中で過去の体験を語りなおすことによって、その意味づけに変化がみられたり、その体験を抱えなおし、心におさめることが期待される。またAさん、Bさんの語りにはいずれも痛みが感じられるが、「トラウマの想起」のように、現在の出来事の何かが引き金となって過去の恐怖が再燃されるのとは違うように思われた。むしろ、戦争の体験と現在の心情が、実際に近いところがあったとは考えられないだろうか。

過去の記憶が現在に浸食しているなら、それらを切り分けることによって安心が得られる。しかしそれが、宮柊二の歌にあったように今の心境の「喩へ」であるなら——無論、意識的に喩えたわけではないだろうが——その人の内的体験に添って、なぜそこでイメージが重なるかを考えた方が、むしろその心情の理解につながる。

Bさんは「米が配給」を「あんな体験」と言っているが、「あんな」という言葉は実体験がないと出てこない。一方、Aさんは「丸焼け」そのものを実際に体験していたかは不明だが、少なくともこの時のAさんにとっては、それがしっくりくるイメージであったと考えられる。記憶やイメージには、今の心境が反映される。それは必ずしも実体験によるものとは限らない。

戦争体験は生々しい記憶として、体験者の心にいつでもどこかにあるものかもしれない。しかし、それに加えて、今現に生きている老いの現実が戦争であるというところはないだろうか。「老いる」ことと「戦争体験」は、心的体験として重なるところがあり、その重なるところに、老いの「索漠」を考えるヒントもありはしないか。

2 老いの「独特な在り方」

永井（2001）の戯曲『こんにちは、母さん』には、現在から戦争の話へと語りがふっと飛ぶ場面がある。

舞台は東京の下町。2年ぶりに実家に帰った50代の昭夫は、70歳を過ぎた母・福江の変化に驚く。福江はボランティアに精を出し、恋もしていた。一方、昭夫はリストラと家庭崩壊の危機を抱えていた。福江と昭夫、母の恋人の直文との奇妙な共同生活が始まるが、その終盤、福江の恋人が突然倒れて帰らぬ人となってしまう。それから数週間後、昭夫が帰宅すると、悲嘆に暮れた福江が酒に酔って、自らの思いを吐露する場面である。

神様も粹なお計らいをするじゃないか。人生の最後にきて、いろんな夢をひろげさせといて、こういうどんでん返しを仕組むなんて。いろんな夢だったって、あと五年、あと三年、直ちやんと楽しく過ごせるかなって、その程度の夢じゃないか。何もあわてて取り上げなくていいのにさ……。

神様はね、試してるんだよ、私のこと。どうだ、これでも生きていけるかって、賭け事みたいに楽し

んでるんだ。東京大空襲のときもそうだった。母さん、十九よ。B29がすぐそこに見えるぐらいの低さで飛んできて、焼夷弾が雨みたいに落ちてきて、ああいうときはみんな、川のある方に逃げるんだね。父さんがありっただけの荷物をリヤカーに積んで、そのてっぺんに小さい弟乗つけて、私も母さんも、妹も後押しして、やっと言問橋まで行ったの。そしたら、浅草の方から逃げしてきた人たちと橋の上で鉢合わせの押し合いになってね、私のリュックに火の粉が飛んだ。ギャーって声出して、欄干から隅田川に飛び込んだら、そのすぐ後だよ、言問橋が火柱みたいに燃え上がったの。夢中で逃げた。あの橋で何千人も死んだんだよ。母さんの家族もみんな死んだ。みんな炭みたいに焦げちゃってさ……あのときは涙も出なかった。だから、マシなんだよ、今度の方が、こうやって涙が出るんだからさ……

“神様がこれでも生きていけるか試してる”。この一点からふっと東京大空襲の話になり、語りのトーンが変わる。今、目の前に火の粉が迫っているかのような語りである。なぜここで、恋人の突然の死の嘆きから大空襲の話へと話題が飛んだのだろうか。文字通り、その19歳の時の体験と比べて、今の方が「マシ」だと自身を慰めるためだろうか。むしろ、「マシ」と言いつつ、福江にとって、それが等価にも近い体験だったということではないか。

福江は自分の口調について、こんなことを言う。

母さんが威張ってんのなんか見たことないだろ？いつも父さんの顔色窺って、お前の顔色も窺ってた。だからね、これからは威張るんだ。こんな悲しい目にあっただから、威張るぐらいいいじゃないか。

話は次第に直文の死のみに限らない，“今の不幸”へと展開されていく。

今朝ね、お新香切ってたら、包丁が重たくて弱った。包丁、もっと軽いのにしないと、これからはお新香も切れないよ。昨日できたことが、今日はもうできない。この先も、どんどんできなくなるだけだ。そういう不幸も抱えてんだよ。

恋人の死と「お新香が切れなくなる」ことが同列のように語られるのは、不謹慎だろうか。むしろ何気なくみえる変化に何をみているかをこそ捉えるべきだろう。

福江は今の“不幸”を次々挙げていき、こうも語る。

母さんが恐いのは、いつ死ぬかってことじゃない。いつ歩けなくなって、いつ寝たきりになるかってことさ。何もかも人のお世話になるのは、どんなに情けないだろうねえ。そういうことの起きる日が、すぐそこまで来てるのに、まだ大丈夫、まだ大丈夫って、騙し騙し希望をつないでる。今ね、その希望をつなぐ材料を、いきなりもぎ取られちゃったんだ。年取って希望をなくすところなるから、今の母さんをよく見とくがいい。(と、泣き出す)

今までの人生で大切にしてきたもの、我が身としてきたかけがえのないものが、否応なく「いきなりもぎ取られる」。そうしたことがいつどこで起きるか分からない中で、包丁が重たくなるような変化をじりじりと日々感じながら、「まだ大丈夫まだ大丈夫と騙し騙し」薄氷を踏むような思いで過ごす。また「もぎ取られ」無に帰したところを抱え、さらにその無化が広がっていく予感にも堪えながら生きていく。この惻々とした営みは、それ自体、一つの闘いではないか。しかもその闘いは、死ぬまで続くのである。

「死はわれわれから一切を奪う。(中略) 老いはすべてを奪うわけではなく、何らかの可能性をわれわれに残してくれる。その点で、老いは死よりも優しく見える。しかし、それはそう見えるだけで、実際は逆である」(池上 2014:134)。つまり老いというものは「死と異なり、身体と精神とを備えたままで生きられる」「独特な在り方」(池上 2014:135)である。このことの切実さが、酒に酔った福江の威勢のいい語りからは直に伝わってくる。

3 人としての矜持

80代の女性Cさんは、脳疾患に倒れ、デイケアに通所し始めて間もない頃に筆者が出会った方である。

よく「慣れましたか?」と訊かれますが、新聞とかで読んだりするのとは全然違う。介護保険やヘルパーさん……何もかも初めてのことで。ヘルパーさんに何を頼んだらいいのかとか。……羞恥心というものを捨てないと、前に進めません。その一つがトイレ。ズボンをサッと下ろされる。ヒュー。病院に入院している時、看護師さんが来られて「拭きましたか?」とか「拭いたか?」ドキッとしました。一人だとよろめくし、ぐずぐずしてたら濡れてしまう。外からドンドン叩いて開けてくる人もありますし。家ではないこと。

色々あります。でもトイレのことが一番。それも日に何度もでしょ。想像できますか?

私は食事の前と後にいつもトイレに行ってたんですが、それを我慢したら、残尿症。これも立派な病気です。やっぱり出すもの出さないとダメね。

何かと闘ってる気がする。それが何なのか……。

車椅子を卒業すること。それがささやかな願望です。

また別のある日。

散髪したい。髪染めたりはできないけどね。化粧したいの。

頭を手術した時、みな剃って。ようやくこれだけ生えてきた。人から「あのおばあさん」って言われて、いやっ、私のことかしら!? まあ、そうかもしれませんが。名前で言うてくれたらいいのに。なかなか

“娑婆っ気”が抜けません。

また別の日。

おもしろいですよ。“もう明日死んでも未練はない”と思ったり，“百まで生きてやろう”と思ったり。

その二つが、こうなってる（ぐるぐるまわってる）の……。

そう言って、口をつぐまれた。

トイレのこと、髪の毛のこと、呼び名のこと。いずれも本当に些細なことのようなのだが、小さくみえることの一つひとつに、これまでとのギャップの大きさをひしひしと感じていることが伝わってきた。日常が非日常と化し、その非日常が日常となる。それがどんなにすごい体験であるか。「願望」という強い思いが込められるはずの言葉に「ささやか」という形容詞を添えられるところにも、その一端がうかがわれる。

「羞恥心」をもつことも「娑婆気」があることも、本来、人として当たり前のことである。それを「捨てないと前に進めない」事態とは、どのような体験だろう。

「何かと闘っている気がする」と言うCさんの闘いの相手は何なのか。自身の病気が、周囲のまなざしか、自身の内に渦巻く思いか、老いるというプロセスか。いや、「それが何なのか……」と語っていたように、簡単に名づけることは出来ないものなのかもしれない。

そんなCさんは、ある日、歌のプログラムの後にこんなことを言われた。

“古い歌”言うても「あれ、そんなんあったかな」というのもあったり。「発声練習や」言われて歌ってますけど、昔は流行歌というのは聴くもので。「お富さん」とか「お座敷小唄」なんて、あんなんは恥ずかしいて。

軍歌は嫌ですね。(出征兵士を)〇〇駅まで見送りに行った。〇〇球場では「行かんといてー!」って言うのが聞えたって。そんなこと言うたら憲兵に捕まるのに。言うに言われんもんがあったんでしょね。〇〇大の学生さん。家族、婚約者……赤い糸で結ばれてたって、簡単に離された。

「あれは時代のせい」「時代が悪かった」って流す人もいるけど、私はそうじゃないと思う。だから私はマイナス思考。病気のことも同じ……。

すぐ余計なことしゃべってしまって。でも私は語り部だと思ってる。私も今のうちだと思う。

「言うに言われんもんがあった」り、「簡単に離された」という言葉は、出征兵士の近親者の思いとして語られているが、今のCさんの心境と重なるところもあったかもしれない。その後の「あれは時代のせい」と言うけれど「私はそうじゃないと思う」という言葉を境に、ここでは、戦争の話から今の病気の話へふっと話題が移行している。

先の戦争について「あれは時代のせい」と流す人に対して「私はそうじゃないと思う」ということと、「病気のこと」とは何が「同じ」なのだろう。あの戦争は、世界や日本の情勢が悪かったからであり、その責任は軍部や政治家にあって、仕方がなかったことなのか。「私はそうじゃないと思う」という言葉は、全てをそこに帰すことはできないことを示唆していると考えられる。

しかし病気のことをCさんが「仕方がないとは思えない」のなら、それを「マイナス思考」とは呼ばないだろう。病気については“どうにかなる”“大丈夫”と自らを励まし、周囲もそのように励ますことがしばしばある。もちろん、病気の事態如何にせよ、悲観せず希望を抱くことは大切である。しかし、ただ“大丈夫”とのみいうとすれば、現状から目をそらしていることにもなるだろう。Cさんはむしろ「ささやかな願望」は持ちつつ、冷静に自分の事態をみつめ、意識的に制御しつつも、率直な思いを語っていたように思われる。

そんなCさんをして「だから私はマイナス思考」と言わしめるものは何だろう。世の中の風潮か、周囲の人間のまなざしか、いやCさん自身の内なる声か。いずれにしろ「マイナス思考」と呼ぶことは、それ自体、「そうじゃない」と声を上げることを抑制する効果がある。

このように「戦争」の話と「病気」の話では一見相反する内容に見えるが、現に起こっていたこと、起きていることを、あたかも無きもののように覆い隠そうとする力がはたらいっている点が共通している。それと対峙することも、「何かと闘っているような気がする」の「何か」の一つではないだろうか。

戦争について「そうじゃないと思う」と言う姿勢は、これまでのCさんの信念や生き方であったかもしれない。が、そのみならず、「羞恥心」や「娑婆気」を捨てるか否か、ギリギリのところにいる今のCさんにとって、「そうじゃないと思う」という言葉は、人としての矜持でもあったのではないか。

4 「隠蔽する力」と「戦争の深淵」

さて、先の戯曲『こんにちは、母さん』の“不幸自慢”の中で、話は次第に、昭夫はなぜ平気でリストラを行い、離婚にも動じないような人間になったのかという話題になり、いつしか、家族の中でしこりになっていたかと思われる出来事の話になる。

昭夫が小6の時、家のトイレに当時流行していたビートルズの落書きをして、ひどく父さんに叱られたことがあった。昭夫が語る。

「母さん、父さんを止めてくれたよね。謝んなさい、謝んなさいって。でも俺はなかなか謝れなかった。だって、母さんがあの絵を褒めてくれたから。だから俺は、母さんが父さんの前でも褒めてくれるかって、楽しみにしてたんだ。でも父さんがあの絵を見て怒り出したら、自分が褒めたことなんかおくびにも

出さないで、ただ父さんに謝れの一点張りだよ。俺がなかなか謝れなかったのは、母さんの豹変ぶりに驚いたからだ。母さんが信じられなくなったんだよ。」これを聞いた福江は茫然となる。「私は最初、褒めたんだっけ……」「褒めたような気もしてきた。私のやりそうなことだもんね……」「どうも褒めたね。だどしたら、ひどいね……」

その晩、小6の昭夫は小さな荷物を抱えて家出をし、踏切の前で立ちつくしていたところを発見された。何を思っただけの家出だったのか。福江はそれを昭夫に訊ねなかったことを思い出し、次のように語る。

母さん、いろんなこと聞かないでよ。下町育ちだから、野暮な真似はしたくないってのもあったけど、本当は聞きたくなかったからだね。あの夜、父さん、うなされたよ。何度も変な声あげるもんだから、母さんも寝つけやしなかった。そのうち、父さん、起き上がって、階段を下りていったのよ。気になって、こっそり後をついていった。父さん、洗面所のとこで立ち止まってね、真っ暗な中で、鏡を見てる。ずいぶん長いことそうしてた。そのうち、何でだったか、車が外を通ったのか、急に、光の中に父さんの顔が浮かんだの。恐ろしい形相だった。父さん、自分でもゾットしたみたいよ。母さんも声も出なくてね。その瞬間、ああ、この人は人を殺したことがあるって思った。戦争に行ったんだから、わかってたはずなんだけど、そのとき、急にわかったような気がしたのよ。実際に人を殺したんだって。しかも、子供を、子供を殺したことがあるような気がした。これは、母さんの勝手な想像だよ。父さんは何も言わなかったし……

……

聞けばよかったね。何をしてるの？何を見てるのって……

……

結婚する前はあの人、子供たちの相撲で行司やったり、お祭りのときなんか、子供たちの面倒見たりして、とっても子供好きだったんだ。でも、ピタっとそういうことはやめた。戦争から帰ってからね。お前が生まれても、おんぶも抱っこもしなかった……

お前が嫌いだったんじゃないんだよ。父さん、自分が嫌いだったんだ。だから自分にそういうことを禁じたんだよ……

これに対し、昭夫は「聞いたって、言わないさ……」と返すが、福江はさらにこう語る。

それでも聞けば、聞き続ければ……言わないってことは、伝わらないって思うからだろ？言っても受け入れてもらえないって……だから、聞かないってこともそうなんだ。母さん、受け入れたくなかったんだ。父さんも、それを知っていたんだらうね……

なぜこの晩、父親は眠れなかったのか。真っ暗な中で鏡を見つめ、恐ろしい形相をしていたのか。息子を怒鳴りつけたことと、戦地で（福江の推察によれば）子どもを殺したことは全く別のことである。ビートルズの落書きを叱った時、昭夫に対して殺意があったわけではあるまい。いや、しかし、では、戦地では殺意があって人を殺したのだろうか。もとより、個人的な動機などありはしなかつたろう。しかし人を殺した時の衝動がその身に刻まれていて、息子を思わず怒鳴った時、ふっと戦地での体験が重なり、その己が怖くなったのではないか。だからこそ、子どもをかわいがることを「自分に禁じた」のかもしれない。福江の夫もまた、ただ「戦争を時代のせいと流す」ことは出来ず、人知れず苦しんできた一人だったのである。

一方、「わかってたはずなんだけど、そのとき、急にわかったような気がした」と語る福江は、夫の顔が窓に映った時におぼえた一瞬の感覚を、実は鮮明に記憶していたと推察される。息子が生まれてもおんぶもしなかつた理由も、その事実を受け入れたくなかつたことを夫が知っていたことも、今初めて気づいたことであるようで、胸の奥ではずっと抱えてきたものでもあつたのではないか。

「戦争が個人的な出来事とも、社会的な出来事とも決定的にことなるのは、『むきだしの暴力』ゆえにどこまでも隠蔽しようとする国家の力がはたらくこと」であり、「戦争が総力戦としてたたかわれるとき、隠蔽もまた総力戦の様相を呈し」、さらにやっかいなことには「むしろ戦争のおわりこそ、ほんとうの隠蔽の総力戦のはじまり」となることである（高橋 2013：698）。

また戦争体験についての語りでは「家族内での『沈黙』」が見出されることがあり、「忘れられているようにみえても、それは『沈黙』であつて、『忘却』ではない」（森・人見・エルマン 2012：277-278）という指摘もある。

高橋（2013：696-695）はまた「平時の日常をくつがえすのが戦争なる非日常なら、その奥のさらなる非日常の漆黒領域こそ、戦争の深淵である。戦争という惨劇をいっそう凝縮した惨劇である」と述べ、「戦闘はもとより戦場に、銃後のいたるところに、深淵は唐突に口をひらく」としている。

福江の語りの中で思いがけずふっと表れた、“父さんが息子をかわいがることを自分に禁じた理由”や、夫婦の間に暗黙の了解のようなものがあつたことも、この「戦争の深淵」の一つと考えられる。それと対峙しようとしてまいと、それは日常の奥に潜在している。

5 生と死の重なり

90代の認知症の男性Dさんは、病棟のフロアの席に、たいてい一人で座っていたが、声をかけるとハハッと笑われ、時が動き出す感がある方だった。ある日、お昼ご飯のすんだ頃にうかがうと、こんな話をされた。

腹のふくれん飯はないかな。「腹八分目」と言うけど、八分目にしたかていっぱいや。けど、いっぱいになったかて、すぐにまた腹が減る。腹のふくれん飯、研究しようと思ったらできんことないけど、人の命がかかるからな。

飯の中に固いもんが入ってて、それをそのまま食べたら死による。米炊くんでも、水入れたら固いもん混ざるやろ？今は水道やからそんなことはないが、昔は固いもん（小石？）が混ざってて、それを選ぶのに一昼夜かかった。兵隊にいた頃はな。けど、それ（米のよりわけ）で、星の数（兵隊の階級？）が増えるわっ、ははっ。

あんなあほらしいことないで。兵隊の内ですぐに喧嘩や。どっちがよう人を殺ったか。「俺は2人や」「俺は3人や」、そんなんで死んだ奴もある。「戦死」いうてるけど、あんなんが戦死かいな。わしが家族に知らしたった。けど、そんなこと知られたら、わしの方がボンッと殺られるわ。

「天皇陛下万歳」とか言うてたけど、あんなんじゃ、ちと無理やな。「肉弾三勇士」って知っとるか？体に弾くりつけて敵に突っ込むの。母親はキチガイのように泣いてたわ。

除隊して子どもと遊ぶのだけが楽しみや。けど、子どもの顔なんて見られへん。わしはこういう子を殺したんやと思うと。帰ってきてから1年か2年は……。そんなんで死んだ奴（自殺？）も結構おるよ。あれは忘れられるもんやない。他人に言えることでもないし、親とももう心がバラバラや。こっちが言うてることも、あっちが言うてることも分からんのやから。親の方が死んだともあるよ。子どもがおかしくなって、どうしようもないと。

目え開けたら嫌なことばかり考える。朝目覚めたらまず何を思う？ハハハ、研究したらええ。そりや食うのに困る時もあるやろ。けどがんばってください。

もういっぺん戦争は起こる。もういっぺん来るよ。わしはそう思ってる。いつかは分からん。わしが死んでからか、生きてるうちか。生きてるうちは、もうええ。わしがもういっぺん生まれきた時に、ボンッと殺られるかもしれん。あと20～30年もすれば親子はバラバラになるよ。世界大戦、もういっぺん来るわ。こんなこと、ふつう人には言えんけど。ま、そうは言うても平和なうちは平和が一番。嫌なこと考えたりせんと、のんきなんがええ。お互いきばりましょ。わしも何か研究成果があつたら、報告するわ。

Dさんのこの語りは、現在と戦争の時がふっと飛ぶのではなく、むしろ最初から重なっていたように思われる。

最初の「腹がふくれん飯」は、身体の具合によって食事が辛いということがあったのかもしれない。しかし、「腹一杯になって、すぐにまた減る」のは、Bさんにみられたような心理的な空腹感だろうか。少し不思議な語りの中で、「研究しようと思ったらできんことないけど」に次いで「人の命がかかるからな」で、にわかに緊張が走った。これは一体何を語られているのか？

注意深く耳を傾ける中、ぼんやりしていたイメージが、「兵隊にいた頃はな」のところでピンと合う。これは「腹のふくれん飯はないかな」の時からDさんの中では潜在的に流れていたも

ので、それがじわりじわりと表面に出てきて聞き手にも迫り、ドキッとさせられたのが「人の命がかかるからな」であったのかもしれない。

「あれは忘れられるもんやない」という戦地での体験は、Dさんがずっと胸に抱いてきたことのようにも、奥底から今浮かびあがってきたことのようにも、浮かびあがりながら、今も奥にあるもののようにもあっただろうか。

過去を過去として語りながら、そして「もういっぺん生まれてきた時」をも見通しながら、Dさんが今生きている現実が、まさにこのようでもあったのではないか。

Dさんはまた別の時にこんなことも語られている。

ここ、もうすぐしまいや。覚悟はできとる。この1～2週間あちこち就職先探しとるが、どこもあかん。知り合いや親戚がいるとこでやっとしぶしぶ入れてもらえるかや。

わしは寿命が見えとるもん。けど、それがどこでひっくり返るか分からん。それが恐い。ひっくり返ったらまた一からや。しかし、まあ9分9厘ないやろが、それがつまらん。

ボンっで首切り。アメリカにいつやられるか。日本のやり方が悪いんや。

3ヶ月くらいしたら入国証が来る。それが来たらこっちの覚悟も決まる。それが来るまではこっちも中々覚悟は決まらん。2～3年もすれば慣れてくるか、クビになるか。そこまでがつらい。ま、ウロウロ探してんと、入るとき。その花を散らさんとやれるかや。

「就職先」や「入国証」「覚悟」などは、往年の働きざかりのイメージや戦時のイメージとともに、「寿命が見えとる」ことともイメージが重なる。「ボンっで首切り」は先の「ボンッと殺られる」と通じているようにも思われた。

Dさんはまた別の時には

「まあ、いっぺん死んだら二度は死なんしな。それでも跳ね返ってくることもあるし。今は跳ね返ってる時」

とも語られている。「今は跳ね返っている時」とは不思議だが、この言葉や「ひっくり返る」という言葉からは、生と死がすぐに反転し、両者の間を行ったり来たりしているようなイメージも浮かぶ。先の語りの中では「わしがもういっぺん生まれてきた時に、ボンッと殺られるかもしれん」とあり、まるで再びお腹の中から出た途端に、ボンッとやられるようにも思われたが、そのイメージと符号するとも考えられた。「もういっぺん戦争は起こる。もういっぺん来るよ」という確信めいた発言も、Dさんがこのように生と死のギリギリの狭間を生きていることと無関係ではなかつただろう。認知症によって意識が茫洋になっていたからこそ、みえやすくなっていた姿かもしれない。

6 「新しい人」へ

前節まで、老いる体験と戦争体験のイメージが重なり、語りがふっと移行する在り様をみてきた。「索漠」は索漠ゆえに沈黙し、それそのものを語ることは難しい。本稿は「老いの『索漠』」をタイトルとしながら、老いの闘いの様相を示すことになった。しかしその秘かで孤独な闘いは、「索漠」と表裏のものとも考えられる。

そこでは、我が身としてきたものが、いきなり「もぎ取られる」体験があり、そのように大切なものが無化される事態を「隠蔽」する力もはたらし、また人間らしさの基本そのものが問われ、生と死が非常に近いところであると考えられた。老いていくとは、こうした中を闘いながら生きていくことでもある。

筆者が出会った80代の女性Eさんは、ある時いみじくも、

「みんな80の戦士よ」

「だからね、ピラミッドはエジプトだけじゃないの。貝塚は至るところにあるの」

と言われた。

「みんな80の戦士」の「みんな」という言葉には、その場集っているメンバー一人ひとりが、状況は異なれど、それぞれ闘っていることへの共感やねぎらいが込められていたように思われる。この「みんな」の中にはもちろんEさんも含まれていただろう。

Eさんは実に多様な話題の中にちらちらと自分の心情と思われるものをうかがわせる方で、「ピラミッド」も「貝塚」もそうした話題の中で出てきたものだった。「至るところにある」というその場所に埋められていたものとは何だったのだろうか。

「戦士」という言葉には、どこか雄々しさも感じられる。老いの闘いを「勝負」と考えるなら、この闘いはいずれは負けと決まっているのだろうか。しかし「あくまで、事実としての老いを見つめ」「全身をかけて老いと闘う時、老いは新しい姿をみせる（小高 2010：32-34）。

確かに『こんにちは、母さん』の福江は昭夫に自分の今の姿を「よく見とくがいい」と泣き、筆者が出会ったCさんは「娑婆気がなかなか抜けません」と言われていたが、そう言いながら、そう語る自分を俯瞰するまなざしがあったように思われる。その在り方はもちろん個々人で異なるが、これらは白洲正子の言う「索漠を楽しむ」ことにも通じているのではないか。

また福江が「本当は聞きたくなかったんだ」と静かに語る時、そこにはどこか清々しさも感じられた。この戯曲の本の帯には「知っているはずの人間とあらためて出会う」と書かれてあり、これがタイトル『こんにちは、母さん』にも結びついていたと思われる。そこには「色々なことを聞いてこなかった」「聞けばよかった」と語る福江の知られざる内面を含めた“新しい母さん”を「こんにちは」とそのまま受けとめるまなざしを感じられる。このまなざしは作者のものではあるが、この劇の中では福江自身、あらためて出会う自分を「こんにちは」と自然に迎え入れて

いるように思われた。

また認知症のDさんは、前節の語りから数年後、そぞろ歩きが多くなり、その言葉もシンプルになっていったが、ある時は、筆者が「こんにちは」と声をかけると、

「!先生の顔、忘れてしてもたわあ!もうー、やーけーくそやあ!」

と言われたり、またある時は、

「筋道はみな同じ!あとは逃げるかどうかや。
頭が分からなくても、そんなことはかまへん。
それはそのままそこに置いといてったらええんや。
ハハっ、なーいしよ、ないしよ!」

と笑われ、またある時は、

「ここ出ても出られんやろ?そやし困ってるんや。
ちやっちやっちやーと行くかー!?
人間もこうなったらあかんな。
人間やないんやろかー!?
人間もこうなったらあかんわ」

と言われた。

自分が「分からん」こと、「忘れた」ことをどこかで認識しつつ、「それはそのままそこに置いとったらええんや」と言うのは一つの知恵だろう。そこにはどこか突き抜けた軽みも感じられた。Dさんは自分を「人間やないんやろかー!?」「こうなったらあかんわ」と言われているが、これも一つの人間の姿ではないか。

阿保(2010:115-118)は認知症高齢者とのかかわりの中で「人間性を失いつつある人と、同じ人間同士として、どのように生きる意味を分かち合うことができるのか、主体性を失いつつある人びとと個人と個人としての相互作用はどのようにして可能か」「人間という存在をどう捉えるのかという根本的な問題への問い」を提示している。阿保のこの問いかけへの一つの答えを、Dさんのこうした姿は示していると考えられる。しかしその軽みの奥に、どんな索漠が広がっていたであろうかも、忘れてはならないだろう。

おわりに

高齢者は、長い年月を生き抜き、死を身近に感じているからこそ、多くの喪失を見据えなが

ら、生への希求もまた日々湧きあがることがある。久保田（2016）では、そうした高齢者の語りから、「若々しさ」とはまた異なる「老いの『みずみずしさ』」があることを示した。この「老いの『みずみずしさ』」は、老いを自然なプロセスとして、「いのちの営みに添う」観点から捉えたものであった。とはいえ、一人の人間の心情としては、老いはむしろ「もぎとられる」中を「闘っていくこと」と捉える方が、その体験にはより近いとも考えられる。

「索漠」は「砂漠」という言葉と、音やイメージも近い。「索漠」と「みずみずしさ」は対のよなものではないだろうか。老いが「みずみずしい」姿を現す背後には、「索漠」とした心象風景が広がっていると考えられる。

さて、故郷が丸焼けになったと語っていたAさんは、その語りが影をひそめた時、こんなことを言われた。

「故郷のことは懐かしいでしょう？消そうと思っても、次々と湧いてくるから」

老いの「みずみずしさ」は、老いの「索漠」と「闘い」の中から、時として生まれてくるものと考えられる。

文 献

- 阿保順子 2010 「自己意識問題としての認知症」阿保順子・池田光穂・西川勝・西村ユミ『認知症ケアの創造 その人らしさの看護へ』雲母書房, 97-123.
- 青柳恵介 1991 「人と作品『かくれ里』の魅力」白洲正子『かくれ里』講談社文芸文庫, 316-328.
- 池上哲司 2014 『傍らにあること 老いと介護の倫理学』筑摩書房.
- 久保田美法 2016 「老いの『みずみずしさ』考」淑徳大学大学院研究紀要第23号, 81-97.
- 小高 賢 2011 『老いの歌——新しく生きる時間へ』岩波新書.
- 森 茂起・人見佐知子・ミヒヤエル・エルマン 2012 「戦争体験にみる『被害』と『加害』」森 茂起・港 道隆編『<戦争の子ども>を考える——体験の記録と理解の試み』平凡社, 232-281.
- 宮 柊二 1975 『独石場』白玉書房.
- 永井 愛 2001 『こんにちは、母さん』白水社.
- 岡 愛子 2010 「戦争体験継承の現象学——戦争体験者の世界と出会う、未体験者として」吉田章宏編著『心に沁みる心理学 第一人称科学へのいざない』川島書店, 131-167.
- 高橋敏夫 2013 「今もつづく惨劇へ／惨劇から」倉林徹夫ほか編集『コレクション戦争と文学 12 戦争の深淵』, 695-713.

An Attempt to Consider “Blank and Bleak” Imagined Scenery of Old Age

Miho KUBOTA

As an inspiring viewpoint about aging, it was considered how getting old can be paradoxically “*Fresh and new-born*” in the author's paper (Kubota, 2016). In this paper, another aspect of old age, “*Blank and Bleak*” *Imagined Scenery* is considered that might be inevitable, although rarely noticed and often passed over.

To find the key of this theme, narratives of war experiences were considered. Listening to elderly people talk, images of war sometimes seem to be similar to experiences of getting old. It showed that old age is a war, and with this war experience a person comes to be a “warrior” again in the process of aging. It also showed that such warriors fight a “silent struggle” in daily life, from which “*Fresh and new-born*” *Old Age* can appear at times.

Keywords: war experience, overlap of some images, powerful force of concealing the facts